

新型コロナ・ウィルスが猛威を振るっている。緊急事態宣言まで出され、例会も3月から中止になりいつ収まるのか、固唾を飲んで見守るしかない状態が続いている。演奏会も軒並み中止になり、こちらもかつてない状況になっている。

中断前の演奏会は2月28日、首相の公立学校の休校要請の翌日という異様な状況の中で行われた。聴衆は3割に満たない、まさに異常事態であったが、オーケストラは渾身の演奏を繰り広げ素晴らしいモーツァルトを創り上げた。このオーケストラの熱演に胸が熱くなった。

翌日から演奏会は全て中止になった。8月の演奏会の中止も手元に届くようになり、コンサートの全くない日々を過ごしている。これまでに経験したことのない展開である。

この機会に今までの音楽との関わりを振り返って見るのもいいかもしれない…と考え、思いつくままにまとめることにした。なにぶん個人的なことなので読んでくださる方々には申し訳ないがご容赦いただければと思う。

僕が音楽を聴きだしたきっかけは、家にあったバックハウスの弾くベートーヴェンのレコードだった。ピアノ協奏曲の第5番、曲が気に入っていたのかこればかり聴いていた。そのうちにグループ・サウンズのファンになり特にタイガースが好きでした。（「廃墟の鳩」や「青い鳥」は今でも名曲だと思っています）。中学校の友人の家で聞いたバーンスタインのシューベルトに夢中になり…と様々な音楽を聴いていた。演奏会に通いだしたきっかけは覚えていない。

ただ、東京都交響楽団の学生席が300円だったので毎回聴きに行っていた。そんな中で日本フィルと小沢征爾さんを聴くことになる。モーツァルトとベルリオーズを聴いた時はびっくり返るような衝撃を受けた。実際、翌日熱を出して学校を休むハメになったのだが、



それがこの演奏会のせいなのか、未だによくわからないのだけれども…。それから日本フィルと都響は聴きに行っていた。かたわらで南沙織さんなどに夢中になっていたごく普通の高校生でした。高校の友人にロック好きがいて、よくイエスやEL&Pなど聴かせてもらった。今でもリック・ウェイクマンは取り出すことがありますよ。





“今までで最も印象に残ったコンサートは何ですか”と聞かれたことがある。今までどのくらい演奏会に行っているのか、その全てを正確に覚えているわけではないのだけれど、様々な演奏会の中で真っ先に頭に浮かぶ演奏会がある。1972年6月16日、日本フィルハーモニー交響楽団第243回定期演奏会。まず、その話からしましょうか。

いよいよその日が来ます。この時日本フィルは大変な事になっていて、スポンサーの放送局からの助成金の打ち切りが決まっていて、オーケストラの存続が極めて難しい局面に追い込まれていた。この時の日本フィルはN響に迫るだけの力量を持っていて、音楽ファンは事態の成り行きを固唾を飲んで見守っていた。市民が立ち上がって支援団体が創られ、こうした動きは連日報道され注目を集めていた。そんな中で1回1回の定期演奏会が熱っぽい素晴らしい演奏が続いたこともこのオーケストラの存続を願う声を大きくしていた。しかし状況は好転せず厳しい局面が続いていた。

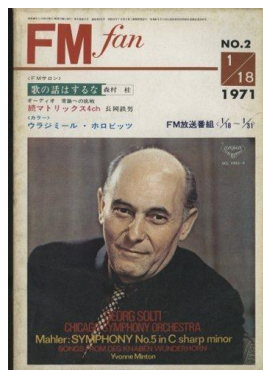
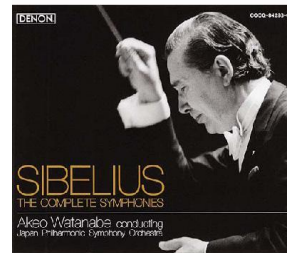
そしてこの日を迎える。日本フィルのシーズン・プログラムの最後の定期になり、曲目はマーラーの交響曲第2番“復活”、指揮は小沢征爾。何とも象徴的なプログラムになったのだが、演奏は異様な緊迫感の中で始まった。聴いていて縛り付けられるような緊張感があり、東京文化会館はピンと張り詰めた空気がずっと続いていた。僕はこんな演奏会の雰囲気はこの後も経験したことがない。この時は、この演奏会が終わってほしくない…と心から思った。この時間がいつまでも続いて欲しい。それは聴いていた全ての人々の気持ちではなかったか。演奏が終わり、会場は大変な興奮に包まれた。この興奮はずっと続いた。時間が経ち、楽員が去っても人々は帰らず拍手を送り続けた。その無人のステージに小沢さんが何度も呼び戻され、それでも聴衆は帰ろうとはしなかった。

この時の演奏会はその後、FMで放送された。まだテープデッキなど持っていなかった僕は小さなラジカセで録音して、そのカセットテープを何度も聴いた。そのテープも破損してしまい、もう聴くことはできない。ただ演奏家と、聴いている人々が同じ場所で同じ意思を共有している連帯感がはっきり感じられる演奏会だった。僕の演奏会の出発点はここから始まる。



この後も演奏会には積極的に出かけた。このころは“怖いもの知らず”というか“凶々しかった”というか、演奏会が終わると楽屋に行って指揮者や演奏家と話をするのが好きだった。(今ではそんな恐れ多いことはとともできません)

小沢さんなどはとても気さくな人で、部屋に招きいれてくれて色々な話をしてくれた。楽屋のドアはいつも開けっ放しで誰とでも気さくに話をしていた。渡邊暁雄先生はシベリウスを指揮した後フィンランドの話をしてくれた。穏やかな話し振りで僕はそれだけでこの人の音楽が好きになった。などなどこれもいい思い出になっている。



さて、オーディオの話だが…。

オーディオはエア・チェック（久しぶりに使う言葉ですね。FM-fanの愛読者でした）を中心に、そのためにカセットデッキを買い、オープンリール・デッキを買い、レコードとテープを中心に聞いて来ました。

AAFCにお世話になって初めてPCの音源をDACと繋ぎ、音楽を聴くことを知りました。音楽の幅がとても広がってきてよく聴くようになりました。また、今まで聴く機会がなかった音楽を知るきっかけになり、JAZZも聴くようになりました。好きな音楽の話ができるのもとても楽しみです。まだ、アナログで生きているようで気がひけるのですが、オーディオに関しては皆さんが丁寧に教えてくれるので少しずつ経験していきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

個人的な話をとりとめなく綴ってきました。お読みくださってありがとうございました。皆様に音楽との素晴らしい出会いがありますよう。そして音楽の創造に携わる人々が安心して仕事に打ち込める日が一日も早く戻ってきますよう願ってやみません。



我孫子オーディオファンクラブ <http://www.aafc.jp/> 2020年 8 月号

編集責任者 鈴木 道郎